

営農情報

第111号平成23年10月3日発行

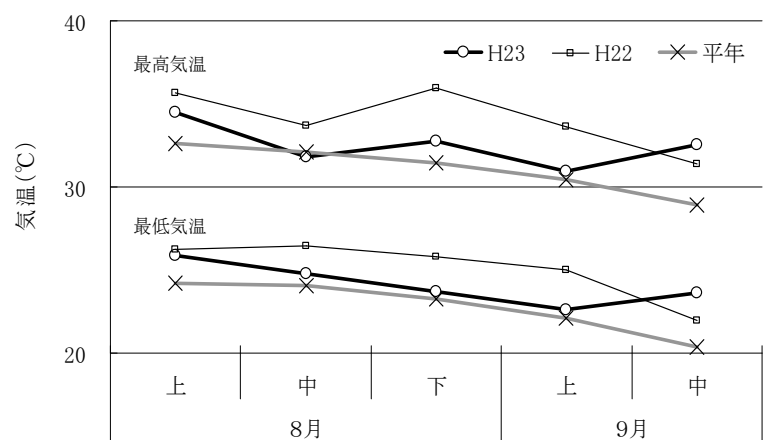
(イチゴ)

J A 福岡大城
南筑後普及指導センター

8月中旬から9月上旬にかけて最高・最低気温が平年並みまで下がったこともあり、株冷・夜冷ともに花芽は順調～早めに分化しました。

普通ポットについては、花芽の動きだしは早く、9月15日に分化したのも確認されました。しかし、9月中旬に気温が上昇したことで、非常にばらつきがみられます。

平成23年度産“あまおう”は、例年に比べ、作型が前進化しているようです。そのため、生育旺盛となりやすく、2番果房の早期分化に向けた対策が必要です。



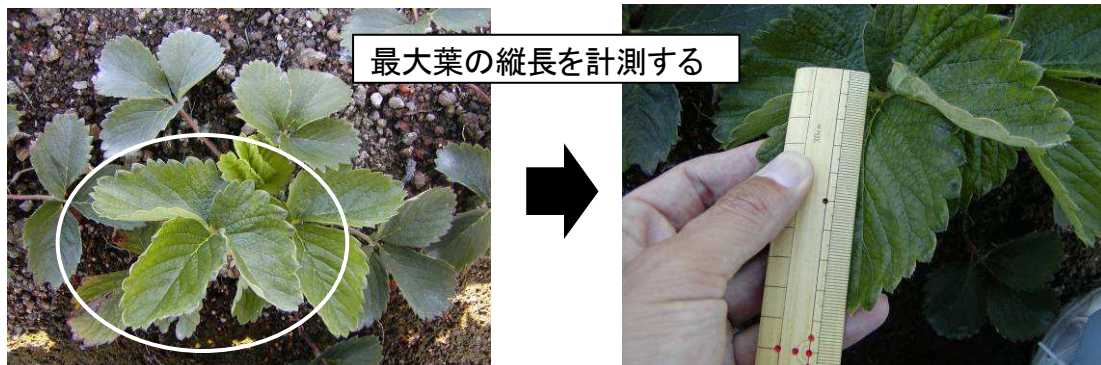
育苗期の気温の比較（久留米：気象庁）

今後の管理

『10月上旬の葉の大きさ』を目安に、生育旺盛株なのか、生育抑制株なのかを判断し、株に応じた管理を行って下さい。

草勢の判断の目安

10月上旬の最大葉長（通常、一番新しく完全に展開した葉）を測定する。



○生育旺盛株の場合（最大葉長9 cm以上）

2番果房分化が遅れる傾向にあり、分化を安定させるためには、これ以上、生育が旺盛とならないようにする。

（例：かん水制限・寒冷紗被覆・マルチやビニル被覆を遅らせる等）

○生育抑制株の場合（最大葉長8 cm以下）

2番果房分化が比較的早期に行われるため、分化確認後は、早急に株の生育促進を図り、厳寒期に向けての株作りを行う。

（例：マルチやビニル被覆を早める等）

かん水

生育旺盛株（特に早期作型）においては、2番果房の早期花芽分化対策として、活着後に徐々にかん水量を控え（マルチ被覆前でpF値2.0）、生育抑制を図る。ただし、生育抑制株（特に普通ポット）の場合は控えないようにする。

寒冷紗被覆

生育旺盛株では、2番果房早期分化対策として、9月25日から10月20日まで寒冷紗で被覆する。ただし、曇天が続くようであれば、除去する。

25日間の長期間の被覆は、遮光率や天候により、軟弱徒長となる場合があるので、曇天が続き、株の弱りが激しい場合は寒冷紗を取り去る。また、寒冷紗被覆下では、土壤水分が乾燥しにくくなるので、かん水量に注意する。

寒冷紗の例	遮光率
シルバー寒冷紗109番	39%程度
黒寒冷紗600番	51%程度
黒寒冷紗610番	58%程度

下葉除去・脇芽除去

- マルチ直前に下葉と腋芽（どろ芽）の除去を行い、マルチ時に葉数が4～5枚になるようにする。
- 摘葉直後は、必ず「炭そ病」「ダニ」の防除を実施する。

追肥・中耕・うね上げ

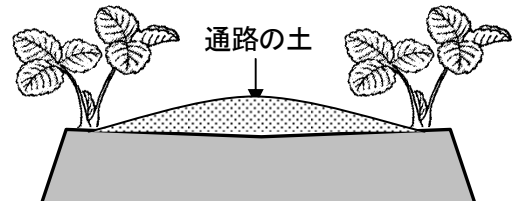
生育が順調な場合は、「マルチ前の追肥」までは窒素分の追肥は行わない。また、窒素成分を多く含んだ葉面散布も行わない（生育状況を判断して対応する）。

- 活着不良等で、生育が悪い場合は、液肥や葉面散布で生育促進を図る。
- 生育旺盛株（10月上旬で最大葉9 cm以上）で2番果房が分化していない場合は、マルチ前追肥を控える。

【追肥量の目安】

肥料名	成分率 (%)	投入量 (Kg/10a)	窒素量 (kg/10a)
新生イチゴ	6-6-4	80kg	4.8kg
あまおう専用肥料	8-6-3	60kg	4.8kg

- 追肥施用後は、必ず中耕を行い、根張りを促進させる（追肥を行わない場合でも中耕は必ず行う）。また、同時に通路をさらえ、うね上をかまぼこ状に整地する。



かん水チューブの設置

かん水チューブの設置は、うね中央部に固定し、マルチ前には散水状態を確認しておく。

マルチ被覆

- 生育旺盛株では、2番果房早期分化対策として出蕾直前まで遅くする。
- 生育不良の場合は、早めの被覆により生育促進を図る。
- マルチを張った後は、十分にかん水を行う。（チップバーン予防）
- マルチの裾は、通常の生育の場合は早めから下げて生育促進を図るが、生育旺盛な場合は肩まで上げておく。

ジベレリン処理

- 1番果房出蕾期に、10ppmで5cc/株の処理を行う。
- かん水後に行うことで、処理効果が高まる。
- 開花後の処理は乱形果となる可能性があるので注意する。

ビニル被覆と直後の温度管理

- ビニル被覆は、平均気温 17℃を下回る頃を目安とする。ただし、開花後雨にあたると奇形果の発生が懸念されるため、開花前にはビニル被覆を行う。
- ビニル被覆後は、高温になりやすいので、サイド・妻面の開放を行い、夜間温度が 10℃を下回るようになったら、ハウスの閉め込みを行う。
- 株が小さく生育が遅れている場合は、早い時期より保温を開始し、やや高め of 温度管理で生育促進を図る。

【 果房の生育状況別温度管理の目安 】

頂果の状況	昼間	夜間	備考
～ 着果期	26～28℃	10℃	新葉の生育促進
着果期 ～ 白熟期	24～26℃	7～10℃	
白熟期 ～ 収穫期	20～24℃	5～7℃	収穫中は品質向上のため低めの管理

ミツバチ搬入

ミツバチは、頂花開花前より導入し準備しておく。巣箱は、ハウス外に設置する。寒冷紗被覆ハウスにミツバチを搬入する場合は、訪花を促すためハウス内に入れておく。

果実マット設置

果皮は水分に弱く、傷みやすいので、果実用マットをうね上に敷く。

マットは、遅くとも頂果の開花期頃までに敷くようにする。設置直後は、風等により飛ばされやすいので押さえ等をしておく。

病害虫防除について

定植後の防除については、害虫は発生初期での防除、病害は発生前の予防防除が重要である。(薬剤については連協より発行した薬剤散布例参照)

● うどんこ病

17℃～20℃で発病が見られるようになる。ビニルを被覆すると湿度が高く軟弱徒長傾向になり発病拡大しやすくなる。定植後からビニル被覆前後まで定期的に予防防除を行う。

● ハスモンヨトウ

葉裏・ハウスパイプ等に産み付けている卵塊の除去や発生初期の若齢幼虫時（1 cm程度）の薬剤防除が重要となる。

● オオタバコガ

成虫（蛾）は、出蕾が近づいた株に、卵をひとつずつ産み付ける。ふ化した幼虫は蕾や果実の中に潜るといった特徴を持っている。そのため、発生初期の防除を徹底する。

● ハダニ類

下葉除去後、マルチおよびビニル被覆前後に、薬液が葉の裏までかかるよう防除する。

● スリップス

開花中の花に飛来し、産卵する。幼虫が果実に被害を与えるので、初期防除を徹底する。

- 1 散布前は必ず農薬ラベルの確認と飛散防止の徹底！**
- 2 散布後は必ず散布器具(タンク等)の洗浄と防除履歴の記帳！**